五　省　訓

1. 至誠に悖るなかりしか。
1. 言行に恥ずるなかりしか。
1. 気力に欠くるなかりしか。
1. 努力に憾みなかりしか。
1. 不精に亘るなかりしか。

五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL（0764）41－2481（代）
発行人　西能正一郎

医療危機を乗り切るために

トップの努力と夢を活かす
私的病院の発展は、全職員の協力で

いま日本の病院医療は大変苦しい環境下におかれている。この苦しくきびしい危機をどう乗り切るべきか、これを乗り切るためにどのように対処したらよいのか、その対策について考えてみたい。

事業は人づくり

この問題を考えるにあっては

1、事業は人づくりであるということ。

2、医療資源は有限であり、どこまでも医療費の値上がりを今後に期待しないということ。

3、私的病院は必ず生き残るし、また生き残らなければならないということ。

このような視点を真正面に据えて、どのようにしてこの困難な事態と時期を切り開いて行くのか真剣に考える必要がある。

今日、世界的な企業として発展している「新日鉄」では前社長時代、たとえ受注が三〇％落ち込んでも一〇％の利益を確保するという目標をたて、これを見事に果たしてきたという。

ところが現在の武田社長になってからオイルショックという非常事態を迎え、この上さらに一〇％即ち四〇％も生産が減少してもなお、従前の利益を守りきるという目標をたて、これを成し遂げながら、さらに経営努力が続けられているということである。

これは素晴らしいことである。そしてこの事実からわれわれが学ぶべき点が非常に多いのではなかろうか。

嫌な仕事も積極的に

病院というところは「病院長を中心にして全職員が協力し院長をたすけて患者のために頑張る」ということに尽きるのであるが、病院の事業を伸ばし発展させるのは一にかかってそこに働く「人」によると言わねばならない。私の病院では全職員に対しつぎのことを「是」として示し、これを守るよう義務づけている。

一、どんな嫌な（つらい）仕事でも進んで積極的にやれ。

二、どんな嫌いな人でも長所を理解して好きになれ。

三、親孝行をせよ。

四、死ぬまで勉強し教養を深めよ。（生涯勉強）

五、なにごとも時間厳守せよ。

そしてわが病院のバックボーンを「真療」と定めている。これは三島の禅寺龍沢寺の第九代名僧山本玄峰老師から病院経営の指針として贈られた言葉であり文字である。

ロマンを持とう

私は現在のような困難な時代の病院人のあり方、身の処し方としてつぎのことを訴えたい。

・使命感を持とう。
・ロマンを持とう。
・無私無心であれ。
・勤勉であれ。
・出づるを制する

とくに職場のリーダーや幹部職員には是非心がけて欲しいところである。

現代の医療はチーム医療、組織医療であるから、患者を中心にすべての職員が一致協力しなければよい医療の提供はできないのである。

出づるを制する

つぎに重要なことは「入るを計って出づるを制する」ことである。「入る」方は診療報酬で公定されており「洩れ」の防止に細心の努力をすればよい訳であるが、問題は「出づるを制する」方である。病院は人と物を消費することで事業が回転しているところであるが、これらに無駄や損失がないか、節約できる部分がないかどうかをし細に点検し調査を徹底することである。

例えば人件費の見直しでパートタイム勤務者の廃止や調整、時差勤務による時間外業務の縮減、部内職員の資格取得で外部からの雇入れ減少、欠員の不補充など費用の大きな部分を占める人件費にはまだまだ切り詰める余地はある筈である。

さらに医薬品、医療材料など一つ一つの品目について再点検すれば無駄や損失を多く発見できるであろう。

消費部門の点検改善

また、見落としてならないのは病院の維持管理費である。営繕や器材の修理など早目に点検整備すれば大きな支出を防ぐことや光熱水費などの日常何気なく消費している部門を点検改善することによって「出づる」方の節約は馬鹿にならない金額を生み出すのである。

二億数千万円の抑え

私の病院でもこれらの措置によって昨年度年間二億数千万円の支出を抑え、実質的には医療費収入が六・五％増えたと同じ効果をもたらし、その成果の大きいのに驚いている。

「新日鉄」ではすでに十年前からJK運動を実施してきているという。これは「自主管理運動」であり、四～五人のグループ毎にリーダーをおいて自主的に点検改善の検討を行なう方式であるが、病院にもこれをとり入れて実施すれば実効をあげることができると思う。

公立は税金でカバー

今日公立病院では、一定の収益をあげるのに、それをはるかに上回る費用を投入して赤字となり、税金でカバーしながら経営されているところも多い。しかし私的病院では、そんなことは許されない。病院のトップの無限の努力と、トップの夢を活かした協力者たちの活動が続けられるならば私的病院は無限の発展が約束されるのであり、この際はそのような発想と全職員の努力が望まれるときなのである。

全力投球を

「勤勉のキンはゴールドのキンに勝る」。これは私の好きな言葉だ。「生也全機現」これは永平寺の道玄禅師の教えであり、私の座右の銘であるが、要するに「現在ベスト主義」ということである。生きている間は瞬時を惜しんで全力投球を続けようということである。

お互いの心掛け

いまのきびしい環境を乗切り日本の医療をよくするためにみんなで努力しなければならない。が、それは一人一人が充実した一日を過し、以上述べたようなことがらについてお互い心掛けるか、どうかにかかっており、これこそが重要なのである。一生懸命に働いて頑張り続けるところにこそ、お互いの幸せがあり、病院の無限の発展が約束される。

（東京都品川区北品川
三の三の二四、
財団法人、河野臨床医学研究所、理事長、河野　稔）

故重松翁の大恩に合掌

西能正一郎

去る三月十日、株式会社カサマツ相談役、重松為治翁が九十才の天寿を全うされた。眠るような大往生であったと承る。その後、営まれた社葬の盛大かつ荘重さ、全社員の心からなる愛惜の姿は、大社長の大きな足跡を物語るに十分であった。

故重松為治翁と私の出逢いは、私の開業の前年、昭和三十六年にさかのぼる。当時、農協滑川病院に勤務しながら、ひそかに開業の準備を始めていた私は、あるものはやる気だけで資金は全くゼロに近く、まことに心もとない状態であった。

だんだん構想が固まってきたものの、肝心の薬品の手当については一向に目途が立たない。病院の薬局長にお願いして開業のニュースを流してもらっても、取引を申し込んでくる問屋さんが一店もなかった。これは由々しい問題で、単に医薬品の入手だけにとどまらず、自分の計画につきあってくれる問屋さんがないほど見通しの暗いものであろうかと反省させられた。場合によっては断念せねばならない場面も考えられることであった。

思い余って、この方面での唯一の知人、日本新薬富山支店長矢野勝次郎氏に一切を打ち開けて相談した。氏は、このニュースは、どの問屋さんも社長の耳にまでは入っていないのであろうと慰めてくれた。そして、そんなことなら、まことに剛腹な面倒見の良い社長を紹介しようということであった。その日から重松の重役から面談の申し込みのあるまで幾日経過したか定かな記憶はないが、薄氷を踏むような毎日であったことは今も生々しく思い出される。

やがて当時専務であった故堀田初年氏（K・K明希社長）を筆頭に二・三の重役と面談する機会が作られ、「西能整形外科として、その晩は別れたが、翌日、重松為治社長が来訪され、「私なぞの力がお役に立つようなら、いかようにでもご協力致します。どうぞ安心して立派な仕事をして下さい」との激励を受け、この社長のお世話になることを決意した。

以来、私は直接重松社長のお金を借りることこそなかったが五福の病院の建設、その後二回にわたる増改築など大きな資金を必要とするときには、重松為治氏個人としての筆頭保証人をお願いにゆき、その都度こころよく御承引いただいて資金調達が可能となった。勿論私も翁が社長として在職中は、薬品の仕入れは殆どカサマツ一店に絞って取引きをさせていただいたことはいうまでもない。

年二回の決算が出るたびに決算書を持参してごあいさつに参上すると、丸い眼鏡の奥の鋭どさを秘めた慈愛のまなざしは、今も私の脳裏に焼きついている。

このようなことから、病院が法人となっても評議員をお願いしてご指導をいただいてきた次第である。このようなエピソードについては知る人も少なくなった。西能病院は、故重松為治社長の陰のお力添えによって今日あることを皆様にご報告して厳父であり慈父のように思われる翁の大恩に感謝すると共に、ご冥福をお祈りするものである。

―合掌―

"安心して立派な仕事を"
病院の今日は、慈父の力添え

医院で使用する医薬品は、必要なだけ重松株式会社が納入する。そして向こう半年間は、その薬品代金は請求しない」というまでもない。

これを受けて私はカサにかかって、「ついては、資金も資産もないので、借入金の保証や、あるいは資金繰りの苦しいときには借金をお願いするかも知れないが、それでもよろしいか」と更に喰いついた。今から考えると、無茶苦茶の話であるが、当時の私の必死の才覚であった。「これは社長の決すること

あすなろ

「どうして、たかが桃太郎ぐらいに負けてしまったんだろうね、鬼が島の鬼は。鬼というからにはもっと強そうなものじゃないか。……きっと鬼はやさしい心の持主だったんだろうね。心弱き者だったんだよ。気はやさしくて力持ちってのは鬼のことさ」（北杜夫作「少年」より）▼鬼というとすぐ悪者扱いにするが、北杜夫のいう通り、桃太郎より鬼の方がやさしい心の持主という場合もある。世に落ちこぼれ人間といわれる者ばかり診察し続けている医師・北杜夫ならではの小説である。ところで、こんな童話を読んだことがある。たしか題は「鬼は内、福は外」▼貧乏のどん底の百姓夫婦がいる。節分の日、まく豆がない。恥づかしいので声だけ出しているうち、間違って「鬼は内、福は外」といってしまう。逃げまどっていた赤鬼と青鬼が飛び込んでくる。二匹の鬼は貧乏な家にすっかり同情し、赤鬼が虎の皮のフンドシを脱いで、おかみさんに差し出し米に替えてもらう▼次に青鬼のフンドシを持参すると、米屋は「赤と青の対（つい）とは貴重」と米俵を馬に積んでくれた。食べて飲んで、鬼二匹は「鬼だって一軒ぐらいは幸せにする力があるぞ」などと話しながら裸で帰っていく――という話▼富山県人は道徳心が厚いというデータがある。喜んではいけない。もし、その道徳が、桃太郎だけを守り、鬼をつまはじきする道徳としたら問題である。親鸞いわく「善人なをもて往生をとぐ。いわんや悪人をや」（歎異抄）

こだま

山桜の一枝

今年も、山桜の一枝が届いた。九十歳のおばあちゃんからである―。

八十八歳のとき、大腿頚部内側骨折で担ぎ込まれた患者であった。血液組成も、心臓の状態も、手術に耐えられるそうにもない。しかし、このままでは、一人の寝たきり老人を作ってしまう。牽引療法を採用すれば必ず合併症を惹起する。私の心の中に迷いが生じた。

人工骨頭を全身状態の落ちぬ間にやれば十日あれば起座し、歩行を始めることができる。だが術中昇天の可能性も十分考えられる。

私は白衣をぬぎ捨て、一人の人間として、おばあちゃんと話してみることにした。

「おばあちゃん！ 今から私が話すことは、あなたの命を賭けての問題です。だから、よく聞いて、決断はあなた自身がしてください」

「手術をせねば寝たきり老人になります。手術をして万一、体が耐えられなければ死につながります。万一、耐えられれば、きっと又、桜を見に山に登ることができるでしょう…」

「そのどちらかの選択を私が決めることはできません。今、私は医者として話をしているのではありません。一人の人間として真っ裸になって話をしているのです」

しばらく、おばあちゃんは、私の顔をじっと見ていた。背中にあぶら汗のにじむ私にとって、とてつもなく長い時間のように思えた。

それから、にっこり笑ったおばあちゃんは―。

「なあ先生、わしゃ今日まで八十八年も生きてきた。残り何年生きるか知らん。だが、その残りは、あんてえ（先生）に、あぐるき（あげますから）、好きなごう（好きなように）使うちよくれ（使ってください）」

しわだらけの顔をにっとゆがめて笑った。

何とすばらしい言葉だろう。この言葉が非力な私の力を倍加したことはいなめない。生命までやろうという、この心。そして、人と人とのコミニケーションが、こんなに大切に思えたことはない。

全身状態との格闘に終始していたこのおばあちゃんも、一ヵ月ぐらいで、たくましく両脚で退院していった。

それから私は、日々の患者との戦いで忘れてしまっていた。いつか冬もすぎ、春の、とある日、山桜の手折った一枝が私のもとに届いた。

―わしと、じいさんと二人で山に桜を見にいってきた。そのときの桜です。先生、ありがとう―

つたない字であった、その添書が、私にとって金科玉条のように感じられたのである。

ことしも届いた山桜の一枝、この心を大切に育てて行きたい。

（大分県宇佐市大字上田一三〇 黒田整形外科医院長、黒田貞利）

健康法の問題 (9)

矢野三郎

四十歳からでも遅くはない
健康づくりは、日常生活の中に

健康法には、いろいろな方法があるけれども、年齢に応じた健康法を実践することも大切である。

体力についていうと、青少年期の伸びる時期には十分伸ばすこと、三十歳代の体力を維持する時期には十分維持すること、そして四十歳代以降の衰える時期には、その衰えをなるべく遅れさせることが必要である。それぞれの年代に応じた体力づくりがあり、体力づくりは乳幼児期から始まるといえるのである。

そして、少なくとも三十歳代の体力を人生七十歳代後半にまで維持することが理想である。若いときから健康に関して、どの程度の関心をもち、そして実行しているかによって、四十歳代の体力には個人差が生じ、六十歳代になると、その個人差はますます大きくなるのである。「弱い子は親がつくる」ということも知っておくべきであろう。

さて、体力は四十歳代になると急激に低下するので、一般にはこの頃から健康に関する意識がたかまってくる。若いときから健康に留意しておくにこしたことはないけれども、四十歳からでもおそくはない。四十歳、五十歳にもなると、家庭的には子供の進学や結婚問題などに気を使うことが多くなり、社会的にも責任ある立場にあり、過労におちいりやすい。

成人病としての「ガン」が増えてくるのも四十歳以降である。体力の限界が分ってくるのと同じように、自分自身の社会的地位や知的能力の限界も分ってくるので、心理的にも不安定になり、初老期うつ病という病気にもかかりやすい。人間ドックは四十歳よりといわれているように、四十歳は人生の曲がり角である。

現在、国会で審議中の法案に老人保健法がある。新聞紙上などで問題になっている老人医療費の一部負担も、この法案に含まれているが、この法案の本来の目的は健康システム、保健センターなどを整備し、四十歳からの保健対策を確立しようという点にある。

昭和五十三年、国は「国民健康づくり運動」を提唱したが、その一貫として中高年の健康管理を実施しようとしているのである。老人が増加してゆく社会にあって、現在の国民の健康状態から予想すると、弱くて病気がちな六十五歳以上の老人が充満する世の中になってしまうのではないかと心配されている。せめて四十歳から、健康づくりに努力し、健やかに老いることができるようになりたいものである。

中高年の体力づくりで注意しなければならないのは、無理をしない、あせらないということである。日頃から運動不足の人は、まず歩くことから始めねばならない。準備なしに急に運動をすると、筋肉を捻ざしたり、骨折をおこしやすい。年輩の人がゴルフを始めて、肋骨の骨折をおこしたという話は多い。体力づくりを日常の生活の中にとり入れるようにすること、習慣とすることも大切であり、テレビ体操や、自分で工夫した体操を朝晩、行うことにより快適な生活をしている人も多い。

定期的に人間ドック検査をすることは健康の維持に有益であり、誕生日健診をすすめている人もある。しかし、何か体に異状があったら、すぐ医者の診断を受けることは、もっと大切である。「かぜのがまんも三日まで」ということわざがあるけれども、平生、患者さんを診察していると、あまりにも手おくれが多いのにびっくりしている。

（富山医科薬科大学教授）

身近に感ずる五省会ニュース

五省会ニュースを拝読させていただいたとき、その感銘を忘れることができず、いつも楽しみに待っている一人でございます。

とくに、西能先生の「わたしはこう思う」は、医療に関する者だけでなく、社会人すべての人たちに当てはまるような人間の生き方、あり方を教えていただき、何度読みかえしても新しい感動をおさえることはできません。

私たちの黒田整形外科でも「五省訓」と同じような「黒田整形定書」が掲げられております。

一、自分の職分の完遂と、その責任を果すこと　一、怠情、無責任を為すべからず　一、依頼、命令の徹底と、それに対する報告を怠るべからず　一、患者在室の場所にての私語、無関係な大笑をすべからず　一、明るい患者さんとの対話を交し、なごやかな雰囲気をつくるべし　一、倹約と環境の整備に勤むべし。

また職員と院長との交換日誌で「鋭視」と題されたノートがございます。これは「己を鋭く視る」という院長の語録からとったものです。先日、この「鋭視」に「わたしはこう思う」の欄写を掲載し、職員の皆さんに読んでいただきました。

足、腰立たず、苦しい闘病生活を終え、自分の足で退院していく患者さんを送るとき、自分の仕事に満足し、これからも奉仕の心を忘れることなく、全員の和をもって一歩一歩前進していきたいと思っております。

一度もお会いしたことのない西能先生、職員の方々、そして患者さんを五省会ニュースを通して身近に感じ、ほのぼのとしたものをおぼえる私なのです。

（黒田整形外科医院　桜井紘子）

わたしはこう思う

〈10〉

20周年を振り返って(上)

意識を変えた保険制度
家族関係にマイナス面も

医療法人財団五省会　西能病院
理事長　西能正一郎

―西能病院は、三月二十一日に開院二十周年記念式を行われましたね。そこで今回は"二十年を振り返って"と題して、その間の医学、医療技術などの移り変わりや、印象深い思い出話をお聞きしたいと思います。

それで、まず皆保険制度が医療に大きく影響しているわけですが、あれは先生が開業なさったころからでは？

「そうですね、あれは私が開業するほんの二、三年前にスタートしました」

保険証を使うのは"気がね"

「当時、一般の患者さんにとっては、保険証で診てもらうのは"気がね"だという感じがありました。一方、医師自身にも自費の治療がいいんだよ、ということを暗に認識させるようなところがないとはいえませんでしたね。そんなことで、お金をいくらでも出すから、保険で使えない薬を使ってくださいという患者さんの要望がしばしばありました」

―まだ皆保険ということが国民に徹底していなかったのですね。

「そうです。恐らく診療する側も、される側も、少しどぎまぎしながら保険制度に入っていったということだと思います。人によっては、わざわざ保険証を出さないで治療を受けたほうがよい治療を受けれるんだとの錯覚を起こしていたようです。

私はそういうことをしなかったですけど、投薬するときに"これは保険外の薬ですよ"と投薬袋にハンコを押していた方もあったようです」

◇　◇　◇　◇

患者も医師も健康保険にアグラ

―そうした初期のころに比べて、最近はいかがですか。

「まあ患者さんも医師もすっかり慣れて、保険というものに頼りすぎている気がしますね。

保険証さえ持っておれば、病気はタダで治せるんだというふうな意識ですね。極端な話をしますとね、交通事故を起こしたとします。自動車だとお金を出さないと直らないが、体の少しぐらいこわれたのなら保険で……というわけです。

これに対して、医療する側も保険のお陰で診療収入が安定しているともいえます。こうした一面があることを、当初、私たちが認識してやっていたかどうかと聞かれますと、非常にじくじたるものがありますね」

―二十年を振り返り、この国民皆保険の浸透は先生にとっても大きな変化だったわけですね。

ところで最近は国民健康保険財政は赤字、そこへ高齢化の波が押し寄せて、保険制度の見直しがいわれていますね。

「国の出費を抑えようというとき、十三兆円を超えたという医療費がヤリ玉にのぼるのも当然でしょう。

そこで、今後どうしていくかということになりますと、医療費の一部を受益者負担しなければならなくなると思います」

タダほど高いものはない

―そうした考えに対して、福祉後退だと反対論もありますが……。

「私の受益者負担の論拠は、国のいうのと少し違っているんですよ。

まず健康を守るということは、生きている自分たち一人ひとりの義務であるわけです。たとえば、健康であるためにいろいろ摂生したりすることが……。そうしなかったから病気になったのだとはいちがいにいえませんが、病気になった方はやはりその分だけいくらかの犠牲を払わねばならない時代がまともなような気がするんです。

みんな何もかもタダというのは、タダほど高いものはないんで、そのうちに大きなツケが回ってくるだろうということを考えますとね……」

「昔、お父さんが病気になると、薬代を稼ぐために娘が遊郭に身を沈めたという話がよくありましたね。それほど極端でなくても、やはり病気を治すには家族みんなで節約したりして、病気を治すという心構えを持つべきだと考えます。病院に入っているのも旅行にいっているのも同じだという気楽な考え方じゃ私はいかんのではないかと思います」

受益者負担が必然の姿
病気に対する心構え復活を

お年寄りも一部負担を

―今国会がヤマ場といわれる老人保健法案については、日医は負担反対の線をだしているようですが……。

「私は老人も当然負担すべきだと思います。というのは、ご老人は自分一人で病気になったのではない。国に貢献しながら病気になったのだから、国のほうでみんな面倒をみなければならないとの考え方もありましょう。

しかし、国だけがお世話になったんじゃなくて、その家族もお世話になったんです。ですから、国がいくらか負担する。そのご老人にお世話になった家族もいくらか負担する。そしてご老人が安心して生きてもらえるようにしていく。これが自然のあり方ではないでしょうか」

「現実に私どものところへ、老人医療費になって、つまり一銭もお金がいらなくなってから通いにくくなったという老人があります。"気がね"でこれないというんです。

自分の病気を治して頂くのだから、なにがしかのお金を払わしてほしいという態度、これは病気に対する真面目さといいますか、病気を迎える心構えがあるんじゃないかと思いますね」

「同じことが家族にもないと、生活の中から病気というものが遊離していってしまうといえましょう。

たとえば非常に極端な話をしますと、何の役にも立たない老人でも、家でご飯を食べていない人はないですよね。入院したら、せめて食事代ぐらいは自分で負担するとか、家族みんなでだしあうということが、日本の家族制度の発想からいっても正しいんじゃないかと思いますね」

問題はらむ老人医療の無料化

―かりに入院中の食費を家族がもつとすれば、医療費は総枠でどのくらい節約になるものでしょうか。

「いや、いや、たとえばの話としていったまでで、私のいいたいのは病気に対する心構えなんです。

今度学会に発表するため、私の病院のデータをまとめているんですが、退院したくても退院できない老人がいるんです。というのは家に帰ってでも面倒をみてくれる人がいないというのが主な理由です。なかには病院におればタダだが、家へ帰ると若いものの世話にならなければならない、気がねである、というのもあります」

「こういう素直に帰れない人は3割ぐらいいます。ではどんな家族の人がそうなるかといいますと、日曜日になってもさっぱり見舞いにこない家族ですね。私どもは家族にたびたび連絡をとってなるべく顔をみせるようにいっているんですが…。いつのまにか病院へ見舞いにこなくなってしまうということは、その家族の意識の中にお年寄りの座がなくなってしまうということです。つまり、せっかくお年寄りの病気が治っても、迎え入れる気持ちがなくなってしまう。

こうしたことの原因の一つは、医療費を家族が負担しないという悪い習慣からきたのだと思いますね。世間でよくいう"姥捨て"みたいな格好になってしまっている。こうしたことをじーっと考えますとね、私は金銭の多寡を問わず、やはり両親のためにどれだけかのお金を財布からだすということがないと、日本のいい家族関係が失われてしまうと思います」

―確かに日本は、高度経済成長期に、無料という名の福祉にのめりすぎたようですね。

「そうです。老人医療というのは、立派な前向きの福祉政策であったかもしれませんが、日本のいい家族関係を少し悪くした面があるようですね。

もちろん、本当に経済的に困って医療費を払えない方々のためには、福祉医療制度もちゃんとあるんですから……」

受益者負担診療姿勢に影響

―受益者負担ということが、診療面で影響することはありませんか。

「そうですね、皆保険当初、一部負担があるとあまり高くなりすぎてもというので診療をあるていど抑制したこともあったようですね。もっともいまでも医療機関の被保険者本人と家族とに分けて健康保険の平均点数を比較して算出されていますが、これは負担金のある人と、そうでない人に対する診療姿勢が少し違うからじゃないかと思うんです。しかし、一つの病気を相手にした場合、歓迎されるべきことではありません。（つづく）

ねんりん
西能病院のあゆみ ⑩

思い出を語る〈2〉

出席者（敬称略）
△元勤務者＝久米信子、高木信正、丸岡ミサヲ、盛田美奈子、開発正子、岡本春子、米田絹代
△現勤務者＝堀井富美子、石倉喜一、水島敏子、津田勝美、川西信子、広長百合子、鍛貫、伏木峯子
△西能正一郎（院長）
西能　紘（副院長）
△司会、中島総務部長

西能院長　これまでの"ねんりん"は、ほとんどが私の発言で、私が歩いた一代記みたいなものになりかねない格好なんです。実際は病院の"ねんりん"なので西能個人のものでは、ちょっと具合が悪いわけです。それに、私の知っているのは自分のことしか知らんわけで、また都合のいいことしか覚えとらんわけでありまして、悪いことはあまり覚えとらんもんです。

それで、ついつい反省されるわけです。開院時代のつらかったころ、一緒にやってくれた皆さんは、それぞれの思い出を持っておられるでしょう。そういうものをつづりあわせていくと、現実に即した話になるんじゃなかろうかと思っております。皆さん、よろしくお願いします。

中島　本日、お集まりいただいたのは、昭和三十七年三月二十一日に富山市星井町で西能整形外科医院を開院してから昭和三十九年までの方たちです。おもしろかった話、あるいはよかった話、悪かった話、いろいろと、ざっくばらんに思い出を語っていただきたいと思います。それで、開院当時の職員は、堀井さん、久米さん（旧姓古道）、高木さん＝出席者＝と、高橋婦長さんの四人だったと聞いていますが。三時のおやつまで出して患者サービスにつとめられたということですが、堀井さん、開院当時はどうでしたか。

掃除にひと苦労

堀井　いま考えてみると、大変な時代でした。私は、院長ご夫妻とは、農協滑川病院公舎の隣り同士で仲よくさせてもらっておりました。それで、食事、掃除、洗濯などをお引受けしました。開院前はホコリがいっぱいで、ふいても、ふいても…。掃除に、何日もかかったことを覚えています。

手を取り足を取り

久米　私の場合は、看護婦になりたいと思っていたら、「三月一日からでてこい」というのです。たった一人の住み込みでした。看護婦といっても、何も知らないので当然見習いです。それこそ、手を取り、足を取りで教えてもらいました。

西能院長　久米さんのおやじさんから、「看護婦になりたいという娘がいるので一つ使ってやってくれないか」ということじゃなかったかな。

中島　すると、久米さんは炊事の方も手伝ったわけですか。

久米　もちろんです。見習いですからね。

ほんまに気の毒

西能院長　あのころの看護婦さんはね、とくに住み込み看護婦は、ほとんどお手伝いさんと同じ仕事をさせられたものです。看護の仕事だけをするようになったのは、ずーとあとからです。

久米さんには悪かったけど、あの当時は、ほんまに気の毒なことでした。（笑い）

中島　高木さんも、そのころ入られたのですね。

床の間にもベッドが
廊下にはみでたナースセンター

出窓を机がわりに

高木　そうです。三月に、矢野先生の紹介で理学療法士としてきました。私も住み込みで、床の間のついた六畳間をもらいました。でも畳は敷いてありませんでした。出窓を机がわりにしました。

中島　開院当初は閑古鳥が鳴くほど静かだったという話で、院長も「初めのころは、どうしようかと思った」ということですが…。

久米　そんなこと、もうとうなかったです。（笑い）

西能院長　足を切断した滑川の河浦さんが入院第一号で、おやつまで出してサービスしたが、いっぱいになって、住宅にまで患者さんを入れたのはいつごろか、全然覚えておりません。

閑古鳥はちょっとだけ

盛田　私が勤めた六月ごろは、毎日、毎日が忙しくて…。ナースセンターが廊下にあって、机をだして、いろいろと仕事をしておりました。閑古鳥が鳴いていたのは、ほんのしばらくじゃなかったですか。

二度びっくり

堀井　私は、立山町の自宅を五時五十分の電車に乗ってくるのですが、「おはようございます」と、玄関に入ろうとすると、患者さんたちが、たくさんおられるので、びっくりです。それで、玄関から入っていけないので、ずっと裏の方から入っていくと、こんどは床の間に患者さんが寝ておられるので、二度びっくりということもありました。

中島　大変でしたね。帰りも遅くなったことでしょう。（笑い）

朝がつらかった

堀井　はい、毎晩八時頃になりました。奥さんと、久米さんと私の三人で最後までやりました。朝早く出てくるのがつらかったものです。

久米　奥さんが手術室をきれいにしておられました。私たちは台所などを…。

中島　盛田さんは家から苦情がでなかったですか。

盛田　私も毎晩遅くなりましたが、主人も病院関係者だったのですから。それに、おばあちゃんがおられたので助かりました。

中島　そのころの院長もやはり朝早くから夜おそくまで、スーパーマンぶりを発揮されていたわけですか。

堀井、久米　そうです。

私たち以上に忙しいのが院長でした。みんな、とにかく忙しくて、何が何やらわかりませんでした。

西能院長　いま考えて見ると、労働基準法違反ばかりやっていたようですね。ところで、忙しいというわりに、さっぱりゼニがなかった。月給を払うのにも困りました。（笑い）

高木　そういえば、月給が何回か遅れたことがありましたね。お金がなかったのじゃなくて、忙しすぎたんじゃないですかね。

懐しい星井町時代

五省会ニュースお送りいただきまして有難うございます。隅から隅まで読ませていただき、感激いたしております。

星井町時代の写真は本当に懐しく、あのころのことを思い出しております。

当時、私がお世話になりましたころの看護婦さんは、高橋婦長さん、高倉さん、古道（現久米）さん、それに佐幸さんと私の五人だったように覚えています。

そのうち、患者さんも、看護婦さんも、どんどんふえて収容しきれなくなり、先生は医院の後ろにプレハブを急造されてお住みになっておられました。

いまは、ずい分大きくなって職員も百人を越すとか、本当にお目出度うございます。

私も、富山で主人を亡くしましてから、一人で二年近く西田地方に住んでいましたが、長男が千葉に家を買いましたので、五十一年十二月に移り、孫たちと同居いたしております。そして近くの個人医院（外科胃腸科）に勤めております。好きだった仕事ですので、なかなか、やめられません。もう二、三年がんばりたいと思っております。

西能病院の益々のご発展を心からお祈りいたします。

（千葉市みつわ台5の26の4、白潟テル子＝元勤務者）

医療の尊さ、奥底さを…

毎回、五省会ニュースをお送り下さいまして、ありがとうございます。楽しく読ませていただいております。届くたびに、新聞の内容の深さに感銘しております。

そのかげの皆様の努力がうかがえ、私も職場を離れて、ますます医療の尊さ、奥深さをしみじみ感じております。

職員の皆様が活力ある前進をされているのが、新聞の内容からもうかがえます。

読ませて戴いているうち、感動やら、感激やら、共感したり、職員の一員であったころが懐しく思いだされます。

どの道も基本は同じだと思い、読んでは心を新たにして頑張っております。

新聞作成も厳しい半面、やりがいもおありでしょう。存分のご活躍をお祈り申し上げます。

（小矢部市本町6の29、池田千佳子＝元勤務者）

○　○　○

障害の苦難を乗り越えて…

車椅子の会の座談会〈中〉

出席者（敬称略）
全国脊髄損傷者連合会富山県支部車椅子部会
会長　志鷹小三郎（六五）
副会長　岡田　尚（五一）
監査　安川　孝（五〇）
事務局長　長川　一雄（四三）
組織部長　川原　重明（四二）
書記　山本　寿枝（三九）
前富山県障害福祉課長　市丸　正年
西能病院長　西能正一郎
西能病院副院長　西能　弘
西能病院総務部長　中島　曠
司会　富山県医師会広報室　千代　慶介

千代　お聞きしていますと、皆さん方は、あきらめがお早いようですが、どんなものでしょうか。

脊損を理解させる

西能院長　お話の途中ですが、ちょっと発言します。脊損の患者さんを迎えたとき、いかに本人に理解させるかが私たちの最初の問題なのです。さらっと生きる人もあれば、自分が動けないんだということを実感として摑めない人もあるわけです。そこで、「この病気はなおらんのだ」ということを、いつ、どういう風に認識させるかが、医者の大きなテーマの一つなのです。

死ぬ人に遺言をいわせるのなら、ちょっとぐらい早くても、かまわないのですが、あとも生きていく人ですから、タイミングをはずすと、やけっぱちになって、全然ダメになってしまうのです。今日、ここにお集まりいただいた方たちは、それぞれ自分で生きることを知りとった優等生ですが、そうでない人が多いような気がします。

それから、山本さんがおっしゃったですね。そう思って、あきらめてしまったら案外楽になったと。これは非常にいいことだと思います。ここまでに到達することは、なかなかのように感じるのですが…。

千代　入院中とか、闘病生活中の、つらい体験や、いろいろな悩みごとのつづきをお聞かせください。

学校へ行けない悲さ

長川　わたしの場合は、みなさんとちょっとケースが違います。ある日、突然、人生が変わるという衝撃はありませんでした。初めから歩けなかったのですから。

一番悲しかったのは、やっぱり小学校へあがる年令に達したとき、友だちがカバンを買ってもらって学校へ行く姿をみたときでした。そこで、〈みんなの中へ飛びこんでみよう〉と考えました。両手にぞうり、ひざあてをつけて歩く練習をしました。野球もやりました。守るときはあまり動かなくてもいいキャッチャーで、攻撃のときは代走者がいたのです。十八歳のとき、自立の道を考えました。

二人の子供のことが

川原　私は頭を強く打っていたので救急車で黒部厚生病院で応急手当のあと、すぐ富山市民病院の脳外科に運ばれました。三カ月ばかりしてから整形外科に回されました。それで意識がはっきりしてきたのは一カ月後でした。妻は、つきっきりの看病。入院中、ずっと気になったのは小学校二年の長女と、四才になる長男のことでした。いまの悩みは、何か仕事をしたいことです。

千代　西能院長にお伺いしますが、優等生になれない方を立ち上がらせるには、どういうことが一番原動力になりますか。

つき離した考え方も

西能院長　動けないということは、足がきかないのだということを頭で理解されていても、自分の実感として、しっかり把握できないと、つぎの動作に移れないわけです。そこのところが一番問題なのです。

そして、保護のしすぎが一人立ちの障害になっているように思えます。トレーニングするにしても、おかあさんが側についていて、車イスに乗り移るとき、つい手を出すと、それだけ上達が遅れるわけです。両親が世話をしてくれる間は、自分がしっかり把握できず、つい甘えてしまう。自立が遅れることになります。

そういう意味で、非常に酷な話ですが、医療機関は医療機関として、社会的な援助は精神的なものだけでいいのであって、あとは本人一人でやっていくんだという、ある程度、つき離した考え方が必要だと思います。

アメリカの脊損患者は二、三カ月で車イスで退院していきます。医療費の高いこともありますが、「自分のことは自分でします」という習慣ができてしまっているからです。つまり、自分が生きてゆくためには自分で動かなければならないということです。

千代　ご存知のとおり、今年は国際障害者年二年目ということになりますが、そういうことも含めて、社会や行政に対する要望がございましたらお聞かせください。

医療機関に車イスで

志鷹　国際障害者年の昨年は、みなさま方のご協力によりまして、車イスの会としては、非常に成果があがったと思っています。こともも、昨年同様一生懸命頑張っています。私からのお願いは、個人といわず公立といわず、すべて医療機関に、車イスで出入りできるようにしてほしいことです。

猛訓練の成果

美しいものが見えてきた

〈第十信〉

松下英勝

金谷婦長さま

お便り戴きながら久しく返事も差し上げず申し訳けありません。かといって自分も決して忘れていたのではないのですが……。

毎日の訓練に疲れ、極度の疲労は、思考力を鈍らせ、時にはナマケものにさえなることもあります。辛い毎日を過していたのです。

自分も、それは、それはこの三カ月、ADL訓練（日常生活訓練）に明け暮れ、この何気ない日常生活という言葉が如何に苛酷で大変なことか。でも、この苦労の甲斐あって、ウンコの自己排便、車椅子から洋式トイレへのトランスファー（移動）、そして己の手でお尻を拭くことができるようになったのです。

仮に、油断して失禁でウンコで汚しても、もうあわてません。その時は冷静にすみません」。

こんな風に、介助者に、その都度お願いするのが、どんなに苦痛で、悲しいか、判ってもらえますか。それが今、すべて自分で処理できるのです。

そして、運動訓練での成果は、車椅子から床に降り、そして又車椅子の上にプッシュアップで昇れるのです。これが出来れば、一人で落ちても安心ですし、当センターの浴場は、床と平面の位置にあり、一人で入浴も可能なのです。

おかげさまで、まったく介助者のいない訓練課へ五月六日付で入所を許されました。しかし、訓練課での生活となると、また大変です。喜びあり、悲しみあり、山あり、河あり、まだまだ自分の道は遠く険しいのですが、一歩一歩前進し、不可能を可能にしますが、何度も何度も挫けそうになります。そんなときの励ましの便り、それにみんな人それぞれの悩みなどが一そう松下を奮起させてくれます。

婦長さん、何故こんな、くどくどと、バカみたいなことを書き連ねてきたか、それは世の中で自分が一番不幸と感じることが時たまあります。しかし、マツのようにに、笑い話のようなことを真剣に一生懸命悩んで、やると思います。それでも耐えて生きている者もいるのです。

婦長さん、あなたは自分の生活の上に、他人の苦悩をつけて。さようなら。

（神戸市垂水区曙町、玉津リハビリテーションセンター訓練課、松下英勝）

嬉しくて放心状態

一人で排便、入浴が…

判断して自分で、きれいに始末できるのです。

自然排便のコントロールに自信がついたとき、自分は、ようやく何もかも終ったと思うくらい嬉しくて放心状態でした。

「浣腸お願いします。お尻拭いて下さい。ウンコで汚しました。すみません、しさを持つたあなたですから悩みも人一倍多いかと思います。

けれど、苦しみから逃避しないでください。負けないでください。あなたも、マツも、きっと頑張る人です。

婦長さん、時々は仕事から離れて自分の時間を持ち少しは骨休めもしてください。精神的にも肉体的にも疲労は健全さを忘れさせます。あなたを頼りにしている人たちのために、いつも明るい婦長でいてください。

こわくさいことばかり書き連ねてごめんね。この便りが届くころの婦長は、きっと笑顔で働いていらっしゃると思います。いつまでも元気でいてください。また便りします。

体だけは、くれぐれも気をつけて。さようなら。

（神戸市垂水区曙町、玉津リハビリテーションセンター訓練課、松下英勝）

お知らせ

内科の診療受付は、五月一日からこれまでの月・木に加えて、土曜日も行なっております。時間は、いずれも午前八時三十分から正午まで。　西能病院

西能病院二十年の歩み〈中〉

昭和45年6月　富山大橋修復完了により西能整形外科地鉄ビル診療所を廃止
昭和46年3月　原子爆弾被爆者一般疾病医療機関の指定
8月　富山県医療人体育連盟加入、野球部、卓球部結成
昭和47年1月　職員バッジ制定
3月　患者通院用、三菱中型620バス購入
11月　外来及び医事部門の改装工事開始、12月末完成
昭和48年2月　喫茶コーナー新設開店（外来待合室）
4月　西能先生、千葉大学整形外科へ、内地留学（1カ月間）
7月　X線テレビ装置設置
昭和49年1月　高木製作所、腰部検診495名
1月　病歴室設置、開設以来の病歴の整理分類
4月　整形外科機能訓練の施設基準に係る承認
11月　身体障害者福祉法の規定による更生医療を担当する医療機関の指定
12月　大腿四頭筋拘縮症治療研究事業の委託契約締結（富山県）
12月　社会福祉協議会西能基金100万円寄付（第一回）
昭和50年2月　リウマチクリニック開設
5月　社会福祉協議会西能基金寄付により病院長褒状授与さる。
9月　社会福祉法人　かたかご保育園、第1回設立発起人会
12月　社会福祉協議会西能基金100万円寄付
昭和51年2月　外来医事部門コンピューター室工事、東芝ホスピコン600型コンピューター設置
昭和51年5月　富山県柔道整復師総会で、病院長「腰痛について」を講演
6月　日本看護協会富山県支部研修会で、病院長「リハビリテーションについて」を講演
7月　西能整形外科病院職員寮及び社会福祉法人「かたかご保育園」建設に着工

リハビリテーションの施設をさらに充実

左は、昭和47年3月患者通院用に購入した三菱中型バス
右は、昭和42年3月に購入したマイクロバス